

小さいながらもたしかなこと 日本の新進作家 vol.15

Things So Faint But Real: Contemporary Japanese Photography vol. 15

2018年12月1日（土）－ 2019年1月27日（日）



森栄喜〈Family Regained〉より 2017年 発色現像方式印画 作家蔵

展覧会概要

「日本の新進作家」展は、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するため、新しい創造活動の展開の場として2002年より開催しています。15回目となる本展では、

「小さいながらもたしかなこと」をテーマに掲げ、自らの感性や考え方、アイデンティティやリアリティを手がかりに、社会との関わりを意識しながら個人的な視点で作品を制作する5名の作家をご紹介します。予測困難な自然災害や広がりを見せる経済格差、LGBTの人々に対する法的整備の遅れ等、個人をめぐる状況がゆれ動き、たしかなことを見出しにくい時代に、作家によって作品に込められた「たしかなこと」。その一つ一つは決して大きなものではないのかもしれませんが、わたしたちに、今を生き抜く勇気や希望を与えてくれます。

本展では、作家それぞれの「小さいながらもたしかなこと」に迫り、その表現の射程を探ります。

本展のみどころ

1. いま、注目すべき日本人作家の代表作・新作を多数展示

本展は、東京都写真美術館が写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家として注目する日本の新進作家を紹介します。本展で紹介する5名の作家は、写真・映像表現、パフォーマンス、文筆活動など広く活躍し、国内外の美術館や出版業界をはじめ高い関心が寄せられています。本展は、デビューからキャリアを重ねたいま、彼らの代表作から公立美術館初出品を含む新作等、計54点を展示します。

2. 社会に向けられた作家それぞれの「個」のまなざし

自然災害や経済格差、ジェンダーやセクシュアリティなど、個人をめぐる状況がゆれ動くいま、作家はそれぞれの「個」の視点を手がかりに、現在進行形の問題を抱える社会と向き合いながら作品を制作しています。

現代の家族の形をプライベートと、パブリックな視点で問う、森栄喜。

作品制作を通して自らのアイデンティティに向き合う、ミヤギフトシ。

経済格差やユースカルチャーなど川崎という地の光と影を写し出す、細倉真弓。

視覚や言語による認識のゆらぎを写真で表す、石野郁和。

人間の営みや生のあり方を変容するベルリンの街から作品で問い直す、河合智子。

彼らが作品に込めたそれぞれの「リアリティ=小さいながらもたしかなこと」は、わたしたちに今をポジティブに生きるためのヒントを与えてくれることでしょう。

3. 多彩なゲストが登場！本展を深く味わえる関連イベント

「出品作家とゲストによる対談」では、岡田利規（演劇作家、小説家）、磯部涼（ライター）、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ（アーティスト）ら、各分野の第一線で活躍するゲストが登場し、作家と作品について、表現について語ります。

会期中、展示室内では森栄喜自身による朗読パフォーマンスが行われるほか、「視覚障害者をつくる美術館ワークショップ」、「担当学芸員によるギャラリートーク」など、展覧会をより深く味わえるイベントを開催します。（詳細は関連イベント紹介欄をご覧ください）

出品作家

森栄喜、ミヤギフトシ、細倉真弓、石野郁和、河合智子（計5名）

出品点数

計54点

作家紹介

森栄喜 (Mori Eiki, 1976 -)

1976年、石川県生まれ。2001年、パーソンズ美術大学写真学科卒業。写真集『intimacy』（ナナロク社、2013年）で第39回木村伊兵衛写真賞を受賞。2017年にKEN NAKAHASHIでの個展で発表した〈Family Regained〉では、夫婦やカップル、友人等、作家と親しい人々と自身をセルフタイマーで撮影。作品はイメージ全体が赤くプリントされ、「家族」が主題となっている。

[出品予定] 写真作品：10点、映像作品：3点

写真作品 〈Family Regained〉 公立美術館初出品

映像作品 《Letter to My Son》 公立美術館初出品、新作 など



左右ともに 森栄喜〈Family Regained〉より 2017年 発色現像方式印画 作家蔵

親しくしている友人、カップル、夫婦など40組の家族に、彼らの普段着をまとった僕自身も被写体として加わり、セルフタイマーで撮影した。撮影の間のほんの数時間、彼らの生活空間で、本物の家族のように演じ合う。奇妙な一体感や、にじみ出るぎこちなさ、それまでの家族内にあった役割や在り方の揺らぎが、ささやかに、時に鮮烈に浮かび上がってくる。

もっとも意外だったことは「家族はこうあるべき」という固定観念が、自分の中に強くあり、今までそれに全く気づかずにいたことだった。その事実を目の前に突きつけられ、あらためて自分の中の家族像と向かい合い、受け入れ、そして一度、真っさらにして、揺れながらも自分なりにまた組み立てていく。そういったことを繰り返しながら撮影を進めた。[中略]

かつて、ただ愛し合うことだけでも同性同士だという理由で犯罪となった時代に、命がけで生きた恋人たち。エイズに臥して添い遂げ合うことができなかった恋人たち。先の将来で結婚が認められ子どもを育てることができることを想像すらできなかった恋人たち。彼・彼女らが夢想し思い描いただろう幸せで愛おしさがあふれる光景が、〈Family Regained〉シリーズそのものでもある。彼らの悲しみ、怒り、喜び、愛おしさが満ちた真っ赤な世界の中で、それぞれの家族がゆるやかにつながり、力強く歩み出す。その足音をこの世界に響かせたい。そんなことを、硬直化し閉鎖感が強まる社会の中で、彼らと同じように僕も夢想している。

ミヤギフトシ (Miyagi Futoshi, 1981 -)

1981年、沖縄県生まれ。2005年、ニューヨーク市立大学卒業。主な個展に「How Many Nights」(ギャラリー小柳、2017年)、「American Boyfriend: Bodies of Water」(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、2014年)等。2012年にスタートしたプロジェクト「American Boyfriend」では、沖縄で沖縄人男性とアメリカ人男性が恋に落ちることの関係可能性等をテーマに、作品制作やトークイベントの開催等を行っている。

[出品予定] 写真作品：5点、映像作品：5点

写真作品〈Sight Seeing/感光〉公立美術館初出品、新作

映像作品〈A Few Minutes of Sight Seeing/感光の数分間〉公立美術館初出品、新作 など



ミヤギフトシ《Sight Seeing / 感光 #24》〈Sight Seeing / 感光〉より 2018年 ミクストメディア 作家蔵

2000年代中頃、ニューヨークに留学していた私は〈Strangers〉という写真シリーズを制作した。ネット経由で面識のないゲイ男性にコンタクトを取り、部屋を訪ね、彼と私のふたりがまるで親密な関係にあるように見える写真をタイマーで撮る、というものだ。それはまた、自分にとってのカミングアウトのプロセスでもあった。写真を見れば、私のセクシュアリティについて知ってもらえる。写真が提示する親密さは他人同士ゆえの妙な歪(いびつ)さを持っていた。[中略]

〈感光〉で私は、男性の部屋を夜に訪ね、部屋の明かりを消して、長い露光時間をかけて相手を撮影した。〈Strangers〉と違い、被写体にはヘテロ男性も多くいた。引き延ばされた時間のなかで、私は被写体となる男性と向き合うことになる。目は少しずつ暗闇に慣れてくるが、相手の表情や目の動きなどは見えてこない。露光中は動けないので、相手も私も黙る。静止したように見える1分でも、何もかもが止まっているわけではない。雨の音が聞こえ、携帯電話の通知音が鳴り、外で虫が鳴き、窓の向こうを電車が通る。被写体の体が呼吸によって小さく動き、輪郭が微かに揺らぐ。

撮影の合間に、相手がぼつりぼつりと、自分のことを口にする。それは、とても些細なことかもしれない。撮影に必死な私は彼の語りに生返事ばかりしながら、何度か、1分間の沈黙を共有した。それがどれだけささやかであれ関係を築きながら、暗闇の中で相手と向き合い、その姿をゆっくりと、静かにカメラに記録していった。

細倉真弓 (Hosokura Mayumi, 1979 -)

1979年、京都府生まれ。2002年、立命館大学文学部、2005年、日本大学藝術学部写真学科卒業。主な個展に「JJuubbiilleeeee」(G/P gallery、2017年)、主な写真集に『Jubilee』(アートビートパブリッシャーズ、2017年)、『写真集 川崎』(サイゾー、2017年)等。月刊誌の連載「ルポ 川崎」の取材で撮影した作品をまとめたシリーズ〈川崎〉では、南部の川崎区を中心に、様々なバックグラウンドを持つ人々や、その周りに広がる風景をとらえている。

[出品予定] 写真作品：8点、映像作品：1点

写真作品 〈川崎〉 公立美術館初出品

映像作品 《Dance(10 times extended EDM)》 公立美術館初出品



左右ともに 細倉真弓〈川崎〉より 2016年 発色現像方式印画 作家蔵

〈川崎〉のシリーズは月刊誌『サイゾー』で2016年1月号から2017年4月号まで掲載されたライター磯部涼氏の連載「ルポ川崎」の取材に同行し撮影された写真群から成っている。

雑誌の紙面において写真は磯部氏のテキストと並置され、各写真には編集者によってキャプションがつけられた。[中略]

かつてあった文脈から切り離された写真が自由でありながら、もとい場所とつながりを持ち続けることは可能なのか、という問いがこの展示の始まりであり、どこまでも具象でありながら何も語ってくれない写真という存在への私なりの近づき方でもあった。

この展示での「テキストの不在」による空白は、テキストと、さらにそこにあったかもしれない可能性を無限に含む空白である。

それは川崎で出会ったいくつかの奇跡のような瞬間、暗い部屋で水割りを作ってくれる美しいシルエットや、ドリンクチケットの代わりに現金を渡してくれる手の動き、部屋に充満する甘い香りやもう忘れてしまった一瞬の感情、混ざり合う血の歴史、出会うものによって自分自身が拡張されるような感覚、カメラのシャッターとシャッターの間に流れた時間、それらを私が撮ることができなかったという事実、あるいはそれらは決して写らないという諦めをも含みうる空白である。

石野郁和 (Ishino Fumi, 1984 -)

1984年、兵庫県生まれ。2012年、ロチェスター工科大学卒業。2014年、イェール大学大学院修了。2015年、「ジャパンフォトアワード2015」受賞、「キヤノン写真新世紀」佳作。2017年、初の写真集『Rowing a Tetrapod』(MACK)を刊行。新作〈Melon Cream Soda Float〉では、視覚や言語による認識の揺らぎから、社会や文化の構造が崩れて見える空間をフラットに写し出している。

[出品予定] 写真作品：16点

〈Melon Cream Soda Float〉公立美術館初出品、新作



左右ともに 石野郁和 〈Melon Cream Soda Float〉より2017年 インクジェット・プリント 作家蔵

現実の社会から切りとられた、もしくはそのコピーとしての写真の中で、自身とつながりのある複数の文化を同時に取り扱う時、世界の新しい解釈が構築される。そこには文化的差異やヒエラルキーから生まれる抑圧や喪失、ひいてはそれに対する葛藤（自らのアイデンティティやリアリティと深く結びついた、視覚や言語、習慣や行動などへの疑問）も反映される。その世界の解釈は常に移ろい、写真の価値観を多様化させる。

〈Melon Cream Soda Float〉では、視覚や言語による認識の揺らぎから、社会や文化の構造や力関係が崩れて見える空間をフラットに写し出すことを試みた。

石野郁和『小さいながらもたしかなこと 日本の新進作家 vol. 15』アーティストステートメントより一部抜粋

河合智子 (Kawai Tomoko, 1977 -)

1977年、愛知県生まれ。2001年、アカデミー・オブ・アート大学卒業。平成28年度文化庁新進芸術家海外研修員(ドイツ)。主な個展に「On the Origin of Springs／泉の起源について」(クンストラーハウス・ベタニエン、2018年)、「UTOPIA」(Gallery 916、2014年)等。ベルリンのクンストラーハウス・ベタニエンで開催した個展では、人間、都市、自然の関係性を考察し、生のあり方を問い直す作品を発表した。

[出品予定] 写真作品：5点、映像作品：1点

写真作品〈Berlin/2018〉公立美術館初出品

映像作品《On the Origin of Springs／泉の起源について》公立美術館初出品



河合智子《On the Origin of Springs／泉の起源について》2018年 シングルチャンネル・ビデオ 作家蔵

生命体のようにゆっくりと形を変え続ける街、ベルリン。再建工事が進む旧王宮やその周辺には、ベルリンを象徴する光景が広がり、大聖堂から鐘の音が鳴り響きます。このポリフォニックな光景からは、私たちの感覚を喚起するようなりズムが生まれています。

すべての物質や現象、生命体は個々が単独に存在するのではなく、循環する水のように、同じ環の中で連鎖、連動しています。《On the Origin of Springs／泉の起源について》は、建築、文学、歴史など、さまざまな要素の繋がりを通して人間や都市、自然の関係性を考察し、人間そして生のあり方を問い直そうとする試みです。

河合智子『小さいながらもたしかなこと 日本の新進作家 vol. 15』アーティストステイトメントより一部抜粋

関連イベント

作家とゲストによる対談

2018年12月8日(土) 15:00～16:30 石野郁和 × 星野太 (美学／表象文化論)

2018年12月14日(金) 18:00～19:30 河合智子 × 鳴川肇 (デザイナー)

2018年12月22日(土) 15:00～16:30 細倉真弓 × 磯部涼 (ライター)

2019年1月11日(金) 18:00～19:30 ミヤギフトシ × 岡田利規 (演劇作家、小説家)

2019年1月19日(土) 15:00～16:30 森栄喜 × ブブ・ド・ラ・マドレーヌ (アーティスト)

会場：東京都写真美術館 1階スタジオ

定員：各回50名

*当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します。番号順入場、自由席。

森栄喜による朗読パフォーマンス「せっかちな未来／An Impatient Future」

2018年12月1日(土) 13:00～13:15(予定)

2019年1月18日(金) 18:00～18:15(予定)

2階展示室内、森栄喜の展示スペースで作家本人と俳優の石倉来輝(劇団ままと)による朗読パフォーマンスを行います。本展チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

2019年1月12日(土) 10:30～13:00

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップです。

対象：どなたでもご参加いただけます

定員：7名、事前申込制

参加費：500円(別途本展チケット[当日消印]が必要です)

※申込方法など詳細は決定次第、お知らせいたします。

担当学芸員によるギャラリートーク

2018年12月14日(金) 14:00～

2018年12月28日(金) 14:00～

2019年1月11日(金) 14:00～

2019年1月25日(金) 14:00～

会期中の第2・第4金曜日14:00より担当学芸員による展示解説を行います。

本展チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

展覧会図録

『小さいながらもたしかなこと 日本の新進作家 vol. 15』

出品作家ステイトメント、担当学芸員による論考を掲載。

執筆：伊藤貴弘(東京都写真美術館学芸員) 装丁：須山悠里

発行：東京都写真美術館 価格：1,890 円(税込)

開催概要

小さいながらもたしかなこと 日本の新進作家 vol.15

Things So Faint But Real: Contemporary Japanese Photography vol. 15

2018年12月1日(土) — 2019年1月27日(日)

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞

助成 芸術文化振興基金

協賛 凸版印刷株式会社／東京都写真美術館支援会員

会場 東京都写真美術館 2階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL www.topmuseum.jp

開館時間 10:00-18:00 (木・金は20:00まで。12月28日[金]および1月4日[金]は10:00-18:00開館)

※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日(ただし、12月24日[月・振休]および1月14日[月・祝]は開館、12月25日[火]と1月15日[火]は休館。年末年始12月29日[土]—1月1日[火・祝]は休館)

観覧料 一般 700 (560) 円／学生 600 (480) 円／中高生・65歳以上 500 (400) 円

※ () は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料 ※1月2日(水)は無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いいたします。

* 図版のトリミングや文字掛け等の加工はできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034／Fax 03-3280-0033 www.topmuseum.jp

展覧会担当 伊藤貴弘 t.ito@topmuseum.jp 鈴木佳子 y.suzuki@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp